

ドキュメンタリー映画

一人になる

医師小笠原登とハンセン病強制隔離政策

群れるな 一人になれ
みんなになるな 一人になれ
ハンセン病強制隔離政策に
一人で抗った 孤高の医師
小笠原登



監督：高橋一郎 / 2021年 / カラー / 99分

日時：2022年 **7** 月 **23** 日 **土** 14:00 ~ 16:45

会場：カトリック麴町教会・ヨセフホール

JR・丸の内線・南北線 四ツ谷駅下車 麴町口徒歩2分

定員：100名 入場無料 事前申込不要

開場：13:30

上映：14:00~15:50

上映後の予定

「国策に抗って」

コメンテーター 浜崎眞実神父（横須賀三笠教会主任司祭・ハンセン病首都圏市民の会）

わが国におけるハンセン病隔離政策の歴史とその国策に抗った医師の姿から学び、ハンセン病患者とその家族の人権について、今も存在するその差別の根深い現実について、ご一緒に考えましょう。

来場時の注意（感染症対策について）

来場時は適切なマスクの着用をお願いいたします。また、体調が優れない方や体調に不安のある方はご来場をお控えください。本上映会は新型コロナウイルスの感染状況によって予定が変更になったり中止になる場合があります。

問い合わせ先：joielapaix@gmail.com

【主催】カトリック東京正義と平和の会（旧東京教区正義と平和委員会）

【協賛】ハンセン病首都圏市民の会 平和をつくり出す宗教者ネット 日本カトリック正義と平和協議会

上映会「映画を観て、ハンセン病問題と人権を考える」第2回

ハンセン病ドキュメンタリー映画

NAGASHIMA

～“かくり”の証言～

2022年

9月3日(土)

13:00開場 13:30開演

東村山市中央公民館ホール

西武新宿線東村山駅 東口から徒歩2分

上映後、監督・回復者の講演があります

入場無料

事前申し込み不要
定員400名

波ひとつありません。

浮かんでいると本土まで運んでくれそうな海なのですが、
凪いでいても「隔ての海」です。

宮崎 賢 監督作品

撮影・編集・構成：宮崎 賢 脚本：曾根 英二

ナレーター：東馬 紀江 音楽：須江 麻友・今井 勉

挿入歌：《愛生園挽歌》 編曲・歌唱・演奏：沢 知恵 録音・ミックス：上野 洋

音効：安田 晃永 MA：塚村 俊孝 ドローン撮影：門野 治雄

編集協力：RSKプロビジョン・河原 大

企画制作：「NAGASHIMA ～“かくり”の証言～」制作実行委員会

2021年 110分





洋画家 清志 初男 (スペイン芸術勲章受章・2003年)
1946年 長島愛生園に入所

ハンセン病ドキュメンタリー映画 NAGASHIMA ～“かくり”の証言～

差別、偏見に打ちのめされても“強く尊く”生きてきた入所者の人生を知って欲しい。
療養所としての歴史を閉じる日も近い。しかし、すべてが忘れ去られることではない。
映画を通じて人権侵害の記憶を次の世代につなげていきたい。

■岡山県瀬戸内市の長島には、長島愛生園と邑久光明園の二つの国立ハンセン病療養所がある。両園の入所者は合わせて180人あまり、平均年齢は88歳。隔離の島で証言を聴く時間も残り少なくなった。■映画は2014年以降の8年間に長島の入所者ら、およそ30人の証言を映像で記録。隔離の歴史を掘り起こした。■長島愛生園の開拓時代や国の患者撲滅政策「無らい県運動」で強制隔離された収容過程、園に反抗した患者を監禁した「監房」、さらに厳しい懲罰施設「草津送り」と言われた群馬県栗生楽泉園の「重監房」での獄死。戦前、戦中、戦後の強制労働、栄養失調などで1,077人が無念の死。入所者が振り返る「死者を焼く煙。煙になってしか故郷に帰れなかった」。優生思想「結婚したら強制的に断種（不妊手術）をさせられた。人間扱いではなかった」と屈辱の体験を語った。■映画が伝えるのは暗い記憶ばかりではない。戦後、特効薬プロミンによって病気が治る時代になった喜び。「人間回復」と呼ばれた邑久長島大橋の開通で「島流し」から解放された。橋で社会と繋がり、園内が明るくなった。ハンセン病患者の全国で唯一の高校「新良田教室」の開校。病と闘いながら、学友と学ぶ喜びがあった。1950年代、文芸のルネッサンスが開いた。文学、音楽、絵画などの活動が社会の窓口となり、励みになった。■ハンセン病国賠訴訟で熊本地裁は強制隔離を定めた「らい予防法」は違憲と断罪。原告は「いまでも苦勞してきた事が報われた」と涙した。■子どもの頃、強制収容された80代の夫妻が故郷の小学校に招かれ児童と一緒に給食を食べ、歌で歓迎され「うれしい うれしい」と言葉を詰まらせた。89歳の入所者の誕生日には、広島県の高校生たちが訪れケーキで祝った。人権侵害の歴史を学び、若い世代がしっかりと受け止めている。

“いまでも背中に平仮名で「かくり」と貼られているよう” “長島しか知りません” “療養所なのに監房が” “獄死も”

無名のハンセン病の元患者たちが封印してきた「強制隔離」の体験を初めて語った。
木の入園番号札を見せながら。“家族に迷惑が掛かるから”と誰にも話さなかった元患者たち。
40年間、通い続けた宮崎賢監督にだからこそ語った人間の叫び。
“もう時間がありません、なにがあったか、知っていて欲しい!”と。

断種手術、堕胎児の保存、解剖、草津の重監房送り、無らい県運動、6畳間に二組夫婦の生活。村八分の葬儀、故郷への墓参、などなど。
温かな目線のドキュメンタリーカメラマンとして知られ、ハンセン病隔離報道の第一人者の宮崎賢監督自らがインタビュー、構成、撮影、編集。

その問いかけは私たちをざわつかさずには置かない。
瀬戸内海に浮かぶ岡山県の長島愛生園には納骨堂がある。小さな骨壺に眠る3700柱の思い。
偏見、差別のなかで人生のほとんどを隔絶の島に暮らし生涯を閉じた人たち。
2020年で、日本最初の国立ハンセン病療養所・長島愛生園が置かれてから90年になった。
赤裸々な元患者たちの証言もやがて聞けなくなる日が来る。

推薦
ジャーナリスト
曾根 英二
(菊池寛賞受賞)



ホームページ

<https://nagashima.mognet.jp>
チラシ・ホームページ制作：モグネット

2022年 **9月3日(土)**
13:00開場 13:30開演
東村山市中央公民館ホール

**講演会
同時開催**

映画上映後、宮崎賢監督の講演と、首都圏に住むハンセン病回復者の方々に“かくり”の生活をお話しいたします。
この映画がハンセン病問題と人権について考える機会となることを願います。

入場無料 事前申し込み不要 定員400名
共催：ハンセン病首都圏市民の会 全生園の明日をともに考える市民の会
後援：東村山市、東村山市議会、東村山市教育委員会、東村山市社会福祉協議会

ハンセン病首都圏市民の会 <https://www.facebook.com/shutokensimin>
お問い合わせ 090-7422-2052 (八重樫) varigrade@yahoo.co.jp (斉藤)

